

⑭ Situated Inference of Temporal Information

S.Tojo*(三菱総合研究所, 日本)

H.Yasukawa(ICOT, 日本)

発表要旨

自然言語の表現というのは、同じ状態について述べていても、見る人の見方によって言語表現は異なるものである。本稿では、状況に対する時間的な「見方」という考え方を導入し、このような言語表現のパラエティを説明する。われわれはこの見方を「意味の関係理論」について定義し、発話状況、記述状況、インフォ、などの相対的位置関係によってテンス・アスペクトが決まるものであると考える。われわれの目的は、個々の単語が持つ時間的な見方を集積して、文全体の持つ時間情報を明らかにするような状況推論システムをモデル化することである。したがって、われわれはまず、テンス・アスペクト、あるいは動詞の時間的意味表現などにこの方法を応用し、その妥当性を議論する。さらに知識表現言語Quixoteを用いて、日本語の「ている」について解析し、その多義性を導くシステムを紹介する。

質疑応答

質問：状況理論による時間情報の推論ということであるが、目下扱っているのは文内の問題だけである。将来拡張することは考えているか。

回答：考えている。テンス・アスペクトの問題だけではつまらないので、時間情報を主体にしたイベント計算のようなものに使えるようにするのがこれからの目標である。

質問：最初に紹介した例文“We have not met snowfall during driving from Madison to Chicago.”に対する解析はどうなったのか。

回答：ああいう例はいまだに扱えない困難な問題のひとつである。否定が入ると状況のスコープが一気に困難になるという例である。